

厚岸湖・別寒辺牛湿原を中心とした エコツーリズムの可能性と環境への影響予測

生方 秀紀

北海道教育大学釧路校理科教育講座

1. はじめに

厚岸湖・別寒辺牛地域は、野鳥の豊富な塩湿地を伴う海岸湖沼と、高層湿原を含む原生の湿性草原、さらにそれらを取り囲む広大な樹林よりなり、第一級の自然環境を誇っている。この内陸の豊かな自然環境と対をなすように、千島海流がうねる雄大な太平洋が切り立った断崖を洗い、沖合いの大黒島には巨大な海鳥のコロニーやアザラシの休息場所がある。これらの自然資源は、現在急速にマーケットが拡大しているエコツーリズムの優れた対象となる潜在性を有している。

釧路国際ウエットランドセンター技術委員会（1996）は、道東の釧路湿原、厚岸湖、別寒辺牛湿原、霧多布湿原におけるエコツーリズムの必要性を指摘している。そのうち、厚岸湖、別寒辺牛湿原におけるエコツーリズムの対象として、それぞれ、カヌーによる水面からの湿地観察体験、バードウォッチングと伝統漁法についての学習を上げている。別寒辺牛湿原については、エコツアーについての基礎も、そのようなツアーをサポートする上での経験が不足しており、次のようなことが必要であるとしている。すなわち、エコツーリズムとして潜在的に利用可能な場所の探索、最小限の施設・設備の設置、そのような設置によって与える環境へのインパクトの調査である。

この指摘から7、8年が経過した。1995年に、別寒辺牛川の支流である大別川のほとり、厚岸湖を遠望する位置に設置された厚岸水鳥観察館は、エコツーリズムの拠点としての機能を充実しつつあるし、別寒辺牛川におけるカヌー下りもほぼ同様の年数の実績を積み重ねている。しかし、エコツアーには、エコツーリストの要求に答え得る知識と技術をもったガイドが必要であるし、ツーリストが満足するコース設定、アクティビティー内容、それに付随する宿泊や交通、ショッピングなどの施設も整備されなければ、これだけの自然資源に

見合ったエコツアーが成立しえない。

そこで本研究では、厚岸湖・別寒辺牛地域におけるエコツーリズムのための潜在資源を調査によって浮き彫りにするとともに、それらの場所を利用したエコツアーにおけるガイドの解説内容・アクティビティーなどについて提案を行なうとともに、エコツアー実施が自然環境に与えるプラスの面とマイナスの面を定性的に予測し、更にはエコツーリズムが厚岸町に与える生活経済上の影響についても定性的に予測することを目的とした。

II. エコツーリズムとは？

調査報告の内容に入る前に、エコツーリズムについての概念規定をしておきたい。エコツーリズムという言葉の世界で最初に使ったのは、メキシコ人の建築家・自然保護活動家であるヘクター・セバロス・ラスクレインで 1982 年といわれているが、アメリカのマーサ・ハニーによれば、エコツーリズムと同様の考え方はすでに 1970 年代後半から徐々に形成されていた（小林，2002）。国際自然保護連合 IUCN が、国連環境会議と世界観光機関とともに 1992 年に出版した「観光を目的とした国立公園と保護地域の開発」の中で、エコツーリズムを「持続可能な観光開発、公園内の環境の保護に有効な一手段」と規定して以来、エコツーリズムは世界中で急速に普及しつつある（小林，2002）。

1. スー・ビートンによる概念規定

エコツーリズム先進国であるオーストラリア在住のスー・ビートンは、その著書「Ecotourism: a practical guide for rural communities」(邦題：エコツーリズム教本，1992)の中で、エコツーリズムは次の三つの要素を含むものであるとしている。

エコツーリズムは自然に基づいた（自然のもとで行なわれる）活動である。

教育的・解説的な要素を含んだ活動である。

持続可能な方法で管理・運営される必要がある。

また、エコツーリズムは地域社会に、雇用拡大、物品・サービスの販売、自然保護や管理のための資金の捻出などの経済効果をもたらすとしている。

2. 国際エコツーリズム協会による定義

国際エコツーリズム協会 The International Ecotourism Society (2004) は、エコツーリズムを次のように定義している。

エコツーリズムとは、環境を保全し、地域住民の福利を向上させる自然の豊かな地域への責任ある旅行である。

また、エコツーリズム活動を実施する者、参加する者は以下の原理を遵守すべきであるとしている。

- ・ 悪影響を最小限にする。
- ・ 環境および文化への気づきと畏敬の念を形成する。
- ・ 訪問者と受け入れ側の両者にとって積極的な経験を提供する。
- ・ 環境保全のための財源上の利益を直接的に提供する。
- ・ 受け入れ側の国の政治、環境、社会風土にたいする感受性を高める
- ・ 国際的な人権および労働協約をサポートする。

III. 方法

1. 現地調査の方法

調査は、インタビュー、資料収集、エコツーリズムの潜在的な対象地域の視察、現に行われている自然体験ツアーの体験取材、野外活動施設の視察、によって行なった。、 以外はフィールドノートへのメモ書きに加えて、デジタルカメラによる大量の写真撮影によって現場の状況を記録した。

2. 現地調査の日程、内容

平成 15 年度 (2003 年) は、以下の 10 日間にわたって、厚岸町内での調査活動を行なった。なお、筆者は、これ以外に、1968 年に、臨海実習のため北海道大学付属厚岸臨海実験所に滞在して以来、たびたび、特に現勤務校に着任した翌年の 1980 年からは毎年、臨海実習のため厚岸を訪れており、また、2000 年から 2002 年まで、昆虫相調査のため別寒辺牛湿原を数回訪れているので、それらの経験も今回の考察に活用する。

- (1) 5 月 13 日：水鳥観察館で資料収集。同館に常駐の環境政策課の永田正行係長に挨拶と厚岸町内における野外体験活動、自然観察イベント等についてインタビュー。厚岸町役場を訪問し資料収集。商工観光課観光係の高田紀和係長に町内のエコツーリズムの現状と方針についてインタビュー、資料収集。厚岸味覚ターミナル・コンキリエを訪問し資料収集。小寺勉支配人に同ターミナルが窓口となって実施している自然体験ツアーについてインタビュー、資料収集。
- (2) 5 月 14 日：厚岸観光協会、宮川佳治会長に厚岸町におけるエコツーリズム、自然体験活動についてインタビュー。お供え山展望地、国泰寺、コンキリエ、愛冠岬を視察。
- (3) 6 月 4 日：水鳥観察館で資料収集、臨海実験所実習施設訪問、生物臨海

実習視察．

- (4) 6月5日：臨海実験所付近の海岸の自然環境視察．北大実習船に乗船し，バラサン岬，厚岸湖，弁天島視察．北大付属厚岸博物館訪問，展示物視察．愛冠岬展望台および周辺視察．北大付属博物館から実験所に下る遊歩道視察．
- (5) 6月6日：北大実習船で大黒島上陸，外洋に面した断崖・岩礁で自然環境視察．船上から大黒島，小島，本土の海岸景観視察．
- (6) 8月27日：望洋台展望台から景観視察．水鳥観察館で館内施設見学，小学生の体験・地域学習参観，同館の渋谷辰生専門員に自然体験活動についてインタビュー．コンキリエが催行するアザラシウオッチング船同乗取材，愛冠岬一帯，大黒島，小島の景観，大黒島のアザラシ休息地の視察．コンキリエ内のミニ水族館取材．末広（まびろ）地区漁業集落視察．あやめヶ原，チンベの鼻取材．
- (7) 8月28日：カヌー体験取材，別寒辺牛川下り．水鳥館で渋谷専門員にインタビュー，資料収集．厚岸町海事記念館訪問，展示物取材．
- (8) 10月4日：厚岸ホースクラブ（小師牧場），外部より見学．水鳥観察館取材．糸魚沢林道入り口，地震のため閉鎖．町民の森視察．太田地区より別寒辺牛湿原を遠望．太田地区視察．厚岸町太田屯田開拓記念館訪問，展示物取材．太田屯田兵屋視察．
- (9) 10月5日：厚岸湖西岸取材．筑紫恋キャンプ場，厚岸町緑のふるさと公園視察，第三遊歩道，ふれあいの森，ネイパル厚岸，展望塔，第四遊歩道．本行寺．別寒辺牛湿原林道，標茶町境界まで視察．
- (10) 11月15日：厚岸湖西岸取材；別寒辺牛第三林道沿いの森林視察．

III．調査結果と考察

調査結果の記述とそれに基づく考察に入る前に，エコツーリズム評価のポイントおよび厚岸地区の自然環境の区分を示しておく．

1．エコツーリズム評価のポイント

エコツーリズムについて最近刊行された本（ビートン，2002；小林，2002）および国際エコツーリズム協会によるエコツーリズムの定義等を参考に，考察では，厚岸でこれから実施されていくエコツアーについて，以下の項目によって事前評価を試みる．

自然環境の保全，あるいは持続可能なものであるか。(持続可能性)
単なるレジャー・アウトドアではなく，自然についての知識・理解・感興の得られるものであるか。(啓発性)
遠方から旅費をかけてまで参加したくなるだけの商品価値があるか．いいかえれば，厚岸ならではの自然・自然産業が活かされているか。(商品価値)
地域の生活文化に悪影響をもたらさないか。(生活文化防衛)
地域の経済活性化につながるか(地域貢献)

2．厚岸地区の自然環境

厚岸地区の自然景観は，おおまかに次の11の景観にわけることができる(～は，辻井ほか[1986]を参照した)．

海洋(太平洋，厚岸湾)，岩礁，干潟・砂浜，汽水湖(厚岸湖)，
河川，塩湿地，湿原，海岸断崖植生(草原，風衝林)，針葉樹林，
針広混交林，広葉樹林．

3．自然環境別の潜在的エコツーリズム資源の検討

以下，上述の景観区分ごとに，調査結果を記述し，エコツーリズム資源としての潜在力について検討し，そこにおいて可能なエコツアーの概略を提案し，それを実施した場合の効果を上述の5つの評価項目に照らしながら，若干の考察を行なう．

(1) 海洋・岩礁・砂浜生態系

1) 海中生物観察：今回の調査で，厚岸湾から厚岸湖1回，大黒島往復2回の計3回の洋上観察を行なった．6月5日の調査では厚岸湖の出口付近で，実習船からドレッジによる海底生物の採集を見学した．厚岸湾の中ノ瀬という浅瀬でのドレッジ採集では，エゾバフンウニやクリガニなどの一般にもなじみの生物もとれるが，コケムシやホシムシ，キンコなど一般には珍しい無脊椎動物が採集され(蛭田眞一氏，私信)，教育・啓発的な価値は高い．ドレッジ採集は学術研究用のサンプリングとして行なわれるもので，持続可能な自然環境利用を標榜するエコツーリズムの対象としてはなじまないであろう．

商品価値の面で検討するならば，熱帯・亜熱帯のサンゴ礁ではグラスポートによるエコツアーが普及していて，船底の透明ガラスになっている窓を通して，ボートの乗客はいながらにして生物を観察できる．中ノ瀬に限らず，バラサン岬から愛冠岬まで続く海岸の岩礁帯で，グラスポートによる観察ツアーを行い，岩礁帯の海草や魚介類の観察をすることは検討に値するのではないか．また，漁業権の関係もあるが，それをクリアして小規模の網や釣り道具を使った採

取を行い、寒流帯特有の生物を船上で観察することは海洋生態系を知る機会となる優れたエコツアーになるのではないか。なお、筆者は沖縄でのサンゴ礁グラスボート・ツアー、エジプトの紅海でのミニ潜水艦およびシュノーケリングによるサンゴ礁ツアーを経験しているので、それとの比較でいえば、サンゴ礁の出来る南の海は透明度が高く、海水の色もコバルトブルー、砂の色も灰白色系、そしてなによりもサンゴ礁およびそこに棲む魚類を始めとした動植物が色とりどりで高度な多様性を持っている。それと比べると、厚岸の寒流帯の海は荒々しく、住む生物も地味で種類数も少ないが、独特の北国らしさを持っている、亜熱帯や暖流の海に面した地域や国々からの客にとって逆に魅力的であるといえよう。船からだけではどうしても見られる海中生物は制限される。船が出発点に戻ってから水族館や博物館でそれぞれ生きた生物、展示標本とその説明を見ることで知識が拡大するであろう。その意味で北大臨海実験所にかつて存在し一般公開していた水族館が閉鎖されたままなのは残念である。地域と連携したかたちで展示を再開することも検討できよう。展示の再開は水族館施設の改修・維持・管理費用に見合った、ツアーリスト入り込み数、それに伴う経済的ならびに環境保全的な効果が得られるかが課題であろう。なお、コンキリエの建物内にもミニ水族館があるがもう少し規模が大きく、解説の充実した水族館が、この水産都市厚岸には欲しいところである。また、厚岸は漁業の町であり、海中動物の観察とともに、栽培漁業の様子についても、勉強できるツアー内容を検討してよいだろう。具体的には、ホタテや牡蠣の養殖の状況を、実際に籠を引き上げて客に見せたり、上陸後、栽培漁業センターに行くと、養殖事業の説明を受けたりするとよい勉強になるだろう。

2) アザラシ類の観察：厚岸の沖合約 3 kmにある大黒島の、外洋に面した断崖の下部の岩礁にゼニガタアザラシの繁殖場所があり、そのスケールは襟裳岬について日本で二番目であるといわれている。北海道でもクジラ・ウォッチングやイルカ・ウォッチングが人気を博しており、アザラシ類も十分エコツアーの観察対象としての価値がある。大黒島のアザラシウォッチングツアーはコンキリエが受け付け窓口となって、すでに 1998 年から実施されており、筆者も今回一般参加者の資格で申し込み、他の参加者と相乗りで 1 時間余りのツアーに参加した。

味覚ターミナル・コンキリエの案内窓口で、ツアー料金 5000 円を支払い、迎いのマイクロバスに乗り込む。東京方面からの 1 家族 4 人と、中年男性 1 人、それに筆者が参加者である。コンキリエでの気温は 22~23 度くらいはありそうな暖かい日だったが、海の上は寒いのでジャンパー等、寒さ避けの衣類を持つようにと、運転手が指示していた。厚岸大橋を渡って、岸壁につくと小さな漁船

(小寺氏の話では昆布漁船を転用したもの)があつて、ガイド兼操縦士が、人数分の救命胴衣を用意して待っていた。船はスピードを上げてまっしぐらに大黒島に向かった。観光客を乗せるように設計されていないので乗り心地はよくないが、漁船体験だと思えば納得できるかもしれない。船のスピードが速すぎて、岩壁などの写真をとってもぶれてしまうし、双眼鏡で海岸線を楽しもうにも視野が定まらない。地元の漁師にとっては見慣れた景色であっても、遠方からの観光客には、岩のひとつひとつ、木の1本1本が珍しいものとして映っているので、バラサン岬から幌万別までの断崖の海岸沿いを走るときはもっとゆっくり航行してもらえるとより多く楽しめると思う。

ガイド兼操縦士は、愛冠岬の沖でエンジンをゆるめて、この岬にまつわる演歌の話や、オジロワシやオオワシの生息場所になっていることなどを解説した。再びスピードをあげると、まもなく大黒島沖に到着した。そこからはゆっくり反時計回りに回る。やがて、島の絶壁の下部、海面すれすれのところに、太平洋戦争当時に作られた、特攻艇を待機させる穴の列が見えるところに来た。ガイドは、船を止めて、その穴について解説し、更に、島が天然記念物であり、島に入るには許可が必要といったことを説明した。少し進んで、灯台の下では灯台の説明をした。これも軍事施設、つまり砲台の転用だったという。やがてアザラシのいる外洋に出た。波が荒くなる。波間に数頭のアザラシが顔を出す。今日は満潮から引き始めたところで、波も強く、アザラシが上陸していない。トッカリ岩は上陸場所のひとつだという。船の接近にアザラシは特に驚いた様子は見せなかったが、こちらを見ている様子はあり、一応警戒しているのではと感じた。仮にツアーを実施する側が慣れてしまい、徐々に距離を縮めていくようなことがあると、突然、アザラシがこの場所を放棄するというのもおこりかねない。客側にもっと近くから見たいという潜在的な要求があるのであろうが、アザラシと船との距離は慎重な調査研究が今後必要であろう。客に双眼鏡の貸し出しをするなどして、距離をとる方法も検討の価値があろう。

そのあと、切り立った岩のウミウの営巣地について説明があつた。小寺氏の話によると、このツアーのガイドを務める人々はコンキリエの事業者募集に応じた地元の漁師であり、副業としてツアーガイドを行なっている。ツアーでの説明内容は、各種資料を元に小寺氏が作成した案に基本的に立脚している。このガイド内容は、凝集されたものであるが必要最小限のものであるともいえるので、より専門的な解説を求めている観光客にも対応できるような、ガイド内容の開発や専門家によるガイドに対する研修実施が望まれる。

3) 海上バードウォッチング

厚岸湾から大黒島にかけては、ウミウ、オオセグロカモメ、コシジロウミツ

バメ、ケイマフリなどの海鳥が生息し、とくに、大黒島の一部は海鳥繁殖地として国指定の天然記念物になっている。これらの海鳥を脅かさない程度に、海鳥の生態を観察するエコツアーは開発の余地があるだろう。宮川氏の話では、本州からのセミプロクラスのバードウォッチャーが厚岸の海鳥を見に来るといふ単発的なツアーはこれまでもあるという。しかし、多くのエコツーリストはそのような単発イベント的なものではなく、日常的に（催行人員に達したらという制限があったとしても）行なわれていて、しかも鳥について素人であっても、ガイドの解説を聞くことで深く理解することができるエコツアーを求めているだろう。そのような客は、「どれがどの鳥か?」「何羽くらいいるのか?」「いつごろ繁殖するのか?」「卵は何個産むのか」「天敵はいるのか」「子の世話は交代でするのか」「どんな餌をとっているのか」など、いろいろな疑問を持つだろう。このような疑問に答えられるようなガイド内容を用意し、また魅力的な観察のできるコース、時期を設定する必要があるだろう。そのためには、厚岸の海鳥の生態について鳥の専門家を招いて講習会や現地実習を開くなどの努力が求められよう。

4) 大黒島本体のエコツアー

無人島は、遠方からの客にとって大きな魅力である。とくに大黒島のように切り立った断崖の島で台地上はほとんど樹木がなく吹きさらしになっているという荒涼とした景観はツアー対象としての魅力が高い。この島に上陸してエコツアーをするとしたら、この島の地学的な成因、本来の自然植生がどのようなものであったか、本来の自然植生が現在のような植生になった経緯、現在の動植物の状況、軍事施設、灯台管理などについての説明、そしてアザラシおよび営巣する海鳥の生態について詳しくガイドすることが必要であろう。台地上を歩行する際には、所々で足をとめて、特徴的な地形や植物、歴史的遺物について実物を前にしての説明が欲しいところである。また、もし実施するとすると、この島の土地所有者、管理者の理解と協力が必要であるし、島の生態系を改変させないようにする注意も必要である。参加客の利便を考えると、飲料水や休憩場、案内板、遊歩道の安全管理、トイレなどについても検討する必要がある。更にツアーの実施によって、特にコシジロウミツバメの営巣に悪影響が出ないようにするなど、生態系へのインパクトを最小にする必要がある。

地域経済面から見ると、このような上陸してのエコツアーは、半日から1日がかかりになるので、厚岸町内での宿泊増加を期待できる。従来の厚岸観光は「通過型」と言わざるをえない面があることが地元関係者のインタビューから伺えたが、それは、上記のような、内容を豊富にし、魅力を高めたツアーを開拓することで「滞在型」ツーリストの増加が見込めるであろう。ちなみに、日本人

が観光地やリゾートに滞在するのは平均せいぜい数日間であるが、欧米人は数週間というオーダーであるという。そのため、エコツアーのメニューの発想そのものが違っている。同じ町に1週間いても退屈しないメニューが用意されることになる。

5) 漁村探訪(砂浜生態系)

エコツアーは、人の手の入らない純然たる自然環境での活動だけが対象ではない。自然資源を持続的に利用しながら生計を立てている地域の人々の生活や文化に、その人々とよい関係を保ちながら、触れ、地域の人と自然との関係に対する理解を深めることもエコツーリズムの目的となる。今回の調査で、アザラシ・ウォッチングツアーは厚岸の小島への接近と簡単な解説がついていた。小島の集落のすぐ近くでボートのエンジンをゆるめての解説によれば、昔は漁家が通年住んでいたが、今は夏場だけ住んでいて、子ども達は本土の学校に通うので夏休み以外は親と離れている。電線や電話線、上水道を本土から海底を通して引いているという。これらの解説には興味をもてた。

遠方からの旅行客にとって、小さな小学校(現在は廃校となり、公民館になっている)があり、津波や高潮の際に高台まで避難する階段のついているこの小集落には興味が引かれ、できれば船から下りて昆布干しの様子を見たり、小学校の建物を覗いたり、岡の上に上って、周りを見回してみたいと思うだろう。往復1時間強で一人5000円のツアーは多少割高感があるが、もっとゆっくり遊覧したり、小島に上陸して小休止したり、軽食やみやげ物選びなどをすればそれなりに楽しめるので割高感は軽減されるだろう。また、一案として、公民館に転用された小学校の校舎の中を戦後の僻地教育のミニ博物館兼用にすれば、高齢者などはなつかしいことを思い出すであろうし、若い世代にとっては昔のことを知る機会にもなるだろう。

なお、漁村の生活体験の対象として、このほか、末広地区での昆布漁見学、苫多海岸などの砂地の場所での地引網体験などが潜在的なエコツーリズム資源である。末広地区には、今回の調査ではじめて訪れたが、静かな漁村である。昆布漁の季節に、昆布採取を手伝ったり、干すのを手伝ったりしながら体験するのも面白いだろう。苫多海岸での地引網は、筆者も実際に数年前、筆者の勤務校が実施した「フレンドシップ事業」の中で体験し、都会(といっても釧路市だが)の子どもたちも色々な魚が取れることに多いに興味を引かれていた。この時の事業に協力してくれた地元の漁師はとれた魚を、地元漁師が使う名前で説明していたが、エコツアーガイドはそれに加えて、学術上の標準和名も説明したり、どのような生活をしているのか、世界での分布はどのようなのかなども説明できれば、よいエコツアーとなるであろう。砂の中には、人に気づかれな

い、小動物（間隙動物）が多数生息している。砂をスコップで掘り、海水が滲み出したらそれをすくい、上澄みをプランクトンネットで濾し、携帯顕微鏡で観察すれば生きた博物館のようになるだろう。意外なところに生物が棲んでいることにツーリストはびっくりするであろう。地引網などの沿岸漁業は、本来自然生産の利子の部分を採取して生活の糧にしている（元金の部分を削っていくと廃業に追い込まれる）ので、持続的な自然利用のよい例になるであろう。

（２）汽水湖（厚岸湖）、干潟、塩湿地、別寒辺牛川河口部

今回、汽水湖である厚岸湖の調査は、調査船で湖内への乗り入れ１回、本土の港町地区の湖岸からの観察２回、お供え山からの遠望による観を実施した。湖内乗り入れでは、厚岸湾への開口部付近でのドレッジ調査、港町地区での干潟への上陸、弁天島への上陸を行なった。これは筆者の勤務校の臨海実験（海洋生態学実習）への同乗の形で実施したものである。

１）干潟エコツアー：港町地区の干潟では、干潟にすむ甲殻類であるアナジャコをスコップで採集し、観察する活動である。膝上まで軟泥に埋まりながらの作業であるが、ザリガニ程度の大きさのアナジャコが採集され、そのユーモラスな形態をながめると達成感は大きなものがある。しかし、この干潟はスケールが小さく、毎年１回の採集であるため、持続可能であるだけで、年に何度も掘り返すとこの生態系そのものが破壊されてしまうだろう。したがって、日常的なエコツアーの対象としては適さない。

むしろ、弁天島には広大な干潟が広がり、持続可能なエコツアーの可能性を秘めている。弁天島も牡蠣島も湖内の浅瀬・干潟であり、かつては牡蠣が大量に水揚げされ、一部にはアッケシソウの群落も成立していたという。現在は牡蠣の養殖には適さなくなり、もっぱらアサリが養殖されている。地元漁師による養殖のための管理も並大抵のものではないようであり、当然、漁業権によって無許可の立ち入りは閉ざされている。大学の海洋生物調査や実習は漁業協同組合の特別の許可のもとに行なわれている。コンキリエでは 1999 年から厚岸湖でのアサリ潮干狩りのツアーを実施していて、なかなか好評のようである。ただし、潮干狩り自体はエコツアーではなく、単に（持続可能ではあるが）伝統的な（実益を兼ねた）レジャー活動あるいは体験活動にすぎない（なお、レジャーとしての潮干狩りを否定するつもりはなく、それはそれで観光やレジャーのよい商品になっている）。牡蠣島、弁天島を含め干潟でのエコツアーは、干潟の生態系についての学習を伴っているべきである。そこに棲むいくつかの生物について、実物を採集しながら説明を受けたり、観察をし、干潟における生物のつながりについて知識を持ち、健全な干潟が維持されることの価値を知る

ことを干潟のエコツアーの目的とすべきである。そういう生態系学習的なエコツアーの中の付随的なものとしてアサリの採取（もちろん，漁業権をクリアした上で），それを持ち帰ってのバーベキューなど，お楽しみの部分もツーリズムの中では意味がある。アサリや牡蠣についても，貝が季節としていつごろ繁殖し，何年かかってどのくらいの大きさになるかとか，原産地はどこか，餌はなにか，最近の変動はあるかとか，水揚げ高の変化などの説明があると自然資源と人間とのかかわりが具体的につかめてくるだろう。

2) アッケシソウ生息地

厚岸湖には，東梅地区，イクラウシ川とトキタイ川河口付近にアッケシソウの生息地がある。厚岸の名のついた，しかも全国的にも非常に分布が限られた植物であるにもかかわらず，厚岸では一般の眼にふれないままになっている。アッケシソウの生息地を損ねない範囲でのアッケシソウ鑑賞ツアーは十分商品価値があろう。今回は生息地へ向かう林道が地震被害で閉鎖されていたために自分の目で生息地を見ることができなかったが，この助成金に基づく内山博之氏・神田房行氏らの調査により，生息地の状況はすでに明らかにされている。エコツアーでは，その生息地にボートに乗って近づいて観察するのか，それとも陸路を歩いて近くまで行くのかは検討が必要である。このエコツアーは，単にアッケシソウを鑑賞に行くのではなく，アッケシソウとは植物の中でどのような位置を占めているのか，どのような条件の生息地に生育するのか，どのような生活史をもつのか，牡蠣島で絶滅したのはなぜか，アッケシソウのほかにもどのような植物が生育しているのか，アッケシソウを含む塩湿地を利用している動物は何か，などの解説が望まれる。

3) 厚岸湖・別寒辺牛川河口部のバードウォッチング

厚岸湖にはオオハクチョウや各種のガン・カモ類，オオワシ，オジロワシなどが飛来し，渡り鳥の重要な中継地となっている。橋本（1986）は，4月に17種，9月に16種の鳥を確認している。また，厚岸湖に接続する別寒辺牛川河口部も水鳥のよい生息地であり，タンチョウの営巣地となっている。この河口部に接して，厚岸水鳥観察館があり，各種自然情報の提供や解説の基地になっているとともに，自然観察やアウトドア活動の基点ともなっている。タンチョウの営巣期間中はこの河口部を含む別寒辺牛川へのカヌー乗り入れが規制されているが，水鳥館から望遠鏡による観察や河口に面する岡の上からのライブカメラ映像の見学などで，十分タンチョウ体験は可能となっている。

このことからわかるように，鳥類は人間の接近に対して敏感であり，不用意にカヌーやボートで接近したりすると，営巣を放棄したりする恐れもある。

逆に、オオハクチョウなど越冬する渡り鳥に餌付けをすることは、ある限度を超えると生態系を破壊する可能性もある。たとえば、渡りの過程で一部の個体が衰弱し、集団から脱落することで保たれていた個体数のバランスが失われ、シベリア等の営巣地の資源衰退や汚染などの可能性が否定できない。もしツアーを実施する場合はその企画段階から鳥類の専門家に十分相談に乗ってもらい、生態系に十分配慮したものにしていけるべきであろう。その上で、厚岸湖・別寒辺牛川河口部のエコツアーの商品化は、むしろ、エコツアーリストの潜在需要をどうとらえ、その要望に答えていくかという、市場調査能力、企画力にかかっているのではないか。この場合、バードウォッチャーだけをターゲットにするのではなく、自然環境一般に興味を持つツアーリストの潜在需要を考えるべきであろう。彼らは鳥の名前や名前と姿の一致にはそれほど関心はなく、むしろ、どのような性格の鳥がどの程度の多様性を示しながらこの地域を利用しているのか、そしてそれぞれの鳥にとってこの地域がどのような意味合いを持つのか（繁殖地なのか、中継地なのか、採餌場所なのか、e t c）、この地域の生態系にとってどのような意味合いを持っているのか、それぞれの鳥は1年を通してどのような生活をしているのか、など他の生物とも共通するトピックについて関心を持っているだろう。そのようなツアーリストに対して、鳥の名前を教えるだけとか、ごく一般的な話をしたのでは満足してもらえないだろう。つまり、ガイドの解説内容は過去の研究や調査の成果や個人的体験に立脚するとともに、日々更新される新しい知見によってリフレッシュされてしかるべきだろう。

4) 厚岸湖の氷上ツアー

厚岸湖は冬季一部の残し結氷し、かつて橋が無かったころは人馬が氷上を歩き交ったこともあるようだ。エゾシカなどの動物も移動路に利用し、時として氷の割れ目から落ちて一命を失うこともあろう。完全結氷しない湖でのレジャー活動は危険を伴い、それだからこそ、氷上エコツアーを実施する場合は、周到に準備し、現地をよく知っているガイドが同行することが必要である。氷上エコツアーのメニューは結氷についての物理学的、自然地理学的説明、人々による氷の利用の説明、氷の下の冬の魚介類の生態、穴を開けての小魚釣り、氷下アサリ採り（いずれも漁業権者の承諾が必要）などが面白いであろう。地元の人にとって、湖が凍ることは当たり前のことなのだが、本州やアジア地域からのツアーリストにとっては、珍しく、大変魅力的なことである。オホーツクの流水観光に匹敵する魅力が潜んでいるといえよう。なお氷上体験自体は、すでに「古番屋ツアー」として、地元青年団体を中心としたグループによって恒例のイベント化されているそうである。このイベントのノウハウは冬季の体験型エコツアーの開発にとって大いに役立つだろう。

(3) 河川・湿原生態系

1) 別寒辺牛川・カヌー下り

別寒辺牛川では 1995 年からコンキリエが窓口となったカヌーによる川下りツアーが行なわれている。カヌー・ステーション(発着場)なども整備され、またタンチョウの営巣期間中の規制などもなされていて、インフラ・ストラクチャーにおいては完成している状態であるといえる。今回は、コンキリエによるカヌー・川下りツアーと提携している地元のカヌー業者に直接、ツアーを申し込んだ(コンキリエを通して契約すると同じ料金で保険がつくという)。別寒辺牛川の上流側のステーションから河口近くまで下ったの、水鳥観察館裏の発着場までの 2 時間弱の行程である。料金は客 1 人なので 15000 円である(人数によって料金が異なる)。待ち合わせ場所の水鳥館駐車場に、カヌーを数台積載したトラックが待っていて、スタッフ 2 名が出迎えてくれた。この車に乗せてもらい、上流川のステーションへ移動。スタッフはてきぱきと 1 台のカヌーとパドル 2 本を川まで下ろす。救命胴衣を身につけてスタッフ 1 名とともに 1 艘のカヌーに乗り込んで、いざ川下りである。私自身、初のカヌー体験であり、これを歓迎するかのように、この日は晴天・微風のおだやかな天気で絶好のカヌー日和となった。わずかに紅葉のはじまった灌木をまじえた低湿地の中をゆっくりとカヌーは下っていく。国道からも人里からも遠く離れた、自然度 100 パーセントの中の自然河川が満喫できた。カヌーに同乗したスタッフはひたすらパドルを漕ぎ、こちらから質問すると答えてくれたが、基本的に、余計な説明はしない、つまり客には五感で直接自然を感じ取ってもらうというスタンスをとっているように感じた。こちらで樹木の名前、鳴いている鳥の種類などを聞けば答えてくれるし、川の増水によってどうなったかななどについては、こちらが聞かなくても説明してくれた。しかしながら、エコツアーリストは、客がだまっけていても、必要十分な解説をしてくれ、また、副次的な体験をメニューに入れているのがエコツアーであると考えているだろう。その意味で、カヌー川下りを今後エコツアーとして充実するためには、以下のようなことについての解説ができるようなガイド養成をしていくことが望まれる。

別寒辺牛川の成因、他の川とくらべての特徴

この川に生息している魚類相とその相対的豊富さ

いくつかの魚の生活史の特徴

魚の餌となる動植物の特徴

川に沿った湿地林の樹種を 10 種類程度は上げ、その中で優先している種、別寒辺牛川を特徴づける種、生態的特徴

この湿地林の草本を 10 種類程度、優先種、特徴種

この湿地林に生息している哺乳類，鳥類，両性爬虫類，昆虫類，それらの特徴．鳥については鳴き声から種を言い当てる．

この川と人々との生活のかかわり．生活上の移動路となっていたのか？林業で木材輸送に使われたのか？漁業とのかかわり．

もしあれば，近代までのアイヌの生活とのかかわり

これらは，いずれも，エコツーリズムの商品価値を高めるものであり，単なるアウトドア・レジャーとしてのカヌー体験に付加価値を高めるものである．こういう質の高いエコツアーが多数用意されるならば，客も増え，厚岸への滞在期間も長くなるのではないか．また，エコツアーを通して，客の環境への意識もより高まり，長期的に見て自然環境保全のためのよい効果をもたらすであろう．なお，今回の川下り中にカモ類が川辺の抽水植物の茂みから水面を蹴立てて下流側に飛び去っていくのを2度ほど見た．タンチョウ営巣期間中は水鳥館によって，カヌーの乗り入れの自主規制が呼びかけられているが，カモについて，その繁殖がカヌーによって影響されているのであれば若干の検討が必要であろう．たしかに，カモ類はタンチョウよりも繁殖力が強く，個体数も繁殖可能な場所も多い．その意味で，タンチョウと同じレベルの配慮の必要はないであろう．検討すべきことは，そのように，カヌーによって棲みづらくさせられているカモの種類は何であるか，影響を受けている期間，個体数はどの程度か，その個体数はカモの北海道東部全体のどの程度の比率を占めているか，他の生息地でも同様の圧迫を受けていないか，などであろう．

2) 別寒辺牛湿原

今回の調査では，別寒辺牛林道沿いに別寒辺牛湿原の東縁を縦断した．筆者は過去にも，湿原の昆虫相の調査のため数回この湿原を訪れており，その際，湿原中央の高層湿原の部分での調査活動も行なった．それらの経験を含めての評価を行なう．

(i) 低層湿原：道道 813 号が別寒辺牛川を横切る橋の東から別寒辺牛林道に降りて低い丘陵地沿いに北上すると左手が別寒辺牛湿原で最も広がりを見せている部分である．大部分が低層湿原で，ヨシやスゲが繁茂し，ヤチハンノキなどの湿地林が侵入しつつある．林道沿いの小高い岡の上には二つ三つの展望地もあり，手付かずの湿原がこれほど広く残されていることに感動するツーリストもあるのではないか．実際，1997 年にイギリスから来た湿地保全専門家イアン・ティロットソン氏はこの湿原を高く評価している．すぐ隣に日本最大の釧路湿原があり，規模的には及ぶべくもないが，見渡すかぎり人の手はいっていない点，ツーリズム上の価値が認められる．なお，湿原を取り囲む丘陵地は過去に木材資源として大量に伐採され，二次林または人工林となっていて，

その点，若干魅力に欠けるのであるが，その分，湿原本体におけるエコツアーの内容で勝負すればよいのではないか．

(ii) 高層湿原：高層湿原には，林道から枝道にはいり，高層湿原に近い急な丘陵地斜面をロープに捕まりながら下り，その直下の湿地林の泥沼状態の場所を膝上まで埋まりながら歩いて行くことになる．高層湿原部分はミズゴケ丘塊の上に高山植物としても知られるガンコウラン，イソツツジ，ヒメシャクナゲなどが生い茂り，低層湿原とはまったく異なる景観を呈している．実際，昆虫相の面でも低層湿原と大きく異なっている（中谷，2002）．高層湿原には，上述の高山植物が可憐な花を咲かせたり，秋には実をつける．このように別寒辺牛湿原の高層湿原は，エコツーリストにとって，中々魅力的な場所であるのだが，現在アクセスが非常に困難である．同じように高層湿原がある釧路湿原温根内地区，霧多布湿原では木道が設置され，多くのツーリストを引き付けている．したがって，別寒辺牛湿原の木道設置は検討課題となるだろう．

(iii) 木道設置について考える：丘陵地のふもととの林道脇に小さな駐車場を設け，そこから高層湿原の一端まで木道を設置すれば，そこへ行くまでの間の低層湿原の観察と，着いてからの高層湿原の観察が可能となる．ただし，木道設置には多大な費用を要し，設置による環境改変（木道下やそれに沿った部分の水面露出，外部からの植物の侵入，動物の移動阻害，展望台から見た景観の阻害など）も引き起こしてしまう．しかも10年くらい経過すると改修どころか，作り変えが必要なくらいに朽ちたり，沈んだり，緩んだりしていく．更に，同様の，上述の釧路湿原温根内地区，霧多布湿原の木道と，ツーリストを招く上で競合する．もちろん，観察内容が異なれば，同じツーリストが順繰りにそれぞれの木道に訪れることもありうるが．したがって，木道を新たに設けることを検討する場合，上記の設置の環境への影響だけでなく，ツーリストの訪問数予測，ツーリストの増加がもたらす経済効果，あるいはツーリズム実施による環境保全への効果などを総合的に判断しなければならないだろう．やみくもに木道を作れば，そこには失敗が待ち受けているだろう．ツーリスト増加を見込むためには，隣接の釧路湿原，霧多布湿原の木道との自然資源の面での商品価値の比較，内容の差別化，ツアーガイドの質の面での充実が前提となる．エコツーリストが道東に数日間滞在し，釧路，厚岸，霧多布に1泊ずつする，あるいは釧路に3泊して日帰りで厚岸や霧多布を回るといった枠組みのエコツーリズムであれば別寒辺牛湿原に木道はいらないだろう．逆に厚岸に数日から1週間以上滞在し，厚岸の自然環境を質の高いガイドツアー付きで満喫するという枠組を実現するなら，別寒辺牛湿原の木道設置は検討価値が十分出てくるだろう．

(iv) 川釣りについて：川釣りは，ツーリズムやアウトドアという世界的流行

が波及してくる前の昔から行なわれていたレジャーであるが、アウトドアブームによって、それを行なう人口が増えていると思われる。エコツーリズムのように自然環境保全とか環境についての学習といった要素はもともと含まれず、釣った魚を持ち帰って食べる楽しみとか、釣った時の喜び、魚をいかにうまく釣るかというゲームあるいは経験に基づく予想などが、川釣りに駆り立てるのだろう。釣りは、イトウなど一部の稀少種や絶滅危惧種を対象にしないかぎり、基本的に持続可能な自然利用であるといえる。鮭などの密漁は論外であるが、ただし、釣り人口が増えてくると、レッドデータ種でなくても特定の魚種の生育が脅かされる可能性があり、一定のデータ集積と広報、マナーの確立が必要である。エコツーリズムは必ずしも川釣りを含む必要はないが、ツーリストの中にもいろいろなタイプがあり、川釣りをしてみたいという客への対応があってよいだろうし、いくつかの川でのエコツアーのメニューの一つに川釣りを入れておくことも検討の価値があろう。その場合も、ただ釣って終わりというのではなく、つれた魚の種名もちろん、年齢や性別、その魚にまつわる話などを解説し、キャッチアンドリリースをする必要があるかどうかの判断、とれた魚の体長を記録しておくなどをすればよりエコツアーらしくなるだろう。

(4) 海岸断崖生態系(草原, 風衝林)

厚岸湾の入り口の両側つまり尻羽岬(西)とバラサン岬(東)は、独特の台地上の平原から海に急斜面の断崖として落ち込んでいる、独特の景観をなしている。特に湾の東側の台地は内陸方向に傾斜していて、海に向かって川はおろか、滝すらも流れ落ちていないという得意な地形である(岡崎 1986)。バラサン岬の東隣の愛冠岬も尻羽岬も演歌の題名や歌詞に取り入れられ、知名度は全国区といえるかもしれない。今回の調査では、この中ですでに観光地化している愛冠岬とチンベの鼻(アヤメが原)を陸上側から調査し、大黒島へ往復する船上からも景観を観察した。

1) 愛冠岬: 愛冠岬の展望台のある場所は広場となっていて、刈り込まれ、後述のアヤメが原とは異なり、草原の植物相は貧弱で興味をもてなかった。ただし、岬の断崖の突端からの風景は中々の絶景であり、美しい海岸線の風景としての価値は高い。また、崖を上から見下ろすと眩暈がしそうなくらいで、ダイナミックな印象もある。ここでエコツアーをする場合は、この地形の成立過程や地質についての説明、そして、この断崖に特有な植生(ミズナラの風衝林や、低地としてはめずらしいミヤマハンノキ林)について、そしてここを生息地としている鳥獣類(とりわけ、オオワシ、オジロワシ)について説明が必要であろう。今回の調査で、広場の植生があまりにも野性味に乏しいので、崖地の縁を踏み分け道づたいに西に踏査し、小高いピークが連続した先の、本当の

岬部分（四等三角点がある）まで往復した。その間、風衝林の林床に、野生を感じさせるエゾオオサクラソウの開花を見たり、数頭のエゾシカ群れが谷地形をはさんだ向こうの斜面を登るのを見ることができた。ただし、この崖の縁の踏み分け道は、つまづいたり、風にあおられたり、地盤がくずれたり、つかまった草木が折れたりすることによって歩行者が転落する危険が多分にある。今回の調査ではその危険を予測し、一步一步進んだが、エコツアーで常時人が歩くようになると、いつかは人命にかかわる事故が起こる可能性がある。また、歩くことによって、この崖地に形成された特異な生態系が傷つくことも明らかである。転落を防止したり、やみくもな踏みつけを防ぐために歩道や手すりを設けるならば、今度は自然の景観を害することになる。今回の調査の印象から、そのような設備を設けてまで、あるいは危険をおかしてまで、岬の先に進むツアーを商品として開拓することは見合わせたほうがよいと判断した。むしろ、愛冠岬の展望台をツーリストに見せ、上に述べたような説明をしたあと、そこから歩いて移動し、すぐ近くにある博物館の展示を見せ、そのあと、後述の森林体験エコツアーへと移行するのがよいであろう。

2) チンベの鼻（アヤメが原）: アヤメが原は、そこに群生するヒオウギアヤメが満開となる6月には、アヤメ祭りも開催され、一般観光客でにぎわうが、それ以外の時期は比較的閑散としているのではないか。今回調査に訪れた時も道央地区のナンバーの高級乗用者に乗った30歳代と思われる二人連れを見かけたただけであった。彼らが来る前は、そこに放牧されている馬の群と私一人だけであり、日も暮れ初め、幼い子どもなら泣き出しそうな寂寥感のある光景であった。厚岸の海岸段丘上では牛馬の放牧が広く行なわれていたようで、アヤメはたまたま牛馬の不食植物であったために、他のいくつかの植物とともに目立つようになったものだという。また、現在放牧されている馬は、牧畜のためというよりも、むしろ観光資源としてのアヤメを維持するためであるという（辻井ほか、1986）。その結果、馬の糞尿により地味も肥え、ヒオウギアヤメを始め、馬の食わない植物はよく育ち、花の色も心なしか、よいように思われる。私の調査では、ヒオウギアヤメ以外にもミツバツチグリ、ハマフウロ、ノギリソウなどの野生植物もあちこちに見られた。馬が好む草が強く圧迫されているという偏りはあるものの、チンベの鼻という、愛冠岬に勝るとも劣らない展望景観を楽しんだ後の、草花ウォッチングは十分エコツーリズムの対象となるであろう。その内容は以下になるであろう。チンベの鼻をはじめ、この段丘の地形の形成過程、地質についての説明。展望台から見える他の岬、島、集落の説明。放牧の歴史と現状。ヒオウギアヤメ、アヤメ祭りの説明、アヤメ以外の植物の名前、生活の特徴、分布上の特徴、開花季節、周辺の森林の樹種とその特徴、この一帯に生息する鳥獣類、昆虫類の説明。鳥の鳴き声

や姿があれば種名と解説を加える。なお、一般受けするヒオウギアヤメを大切に
するあまり、それを引き立てるために、それ以外のあまり見栄えのしない野
生植物を除去するような活動も見られるようであるが、それは本来のエコツ
ーリズムの資源から見ると、ややはずれる行為であるように思われる。

上述の、断崖上部の草原・疎林内でのエコツアーとは別に、断崖の下部で海
岸づたいに歩き、地形・地質の観察、海岸動植物の観察をすることも検討する
価値があろう。とくに地質については、化石の発見なども面白いであろうし、
スランプ構造（層間褶曲）など、ほかではあまり見られない地質もあり（岡崎
1986）、この方面に関心のあるツアーリストを喜ばせるだろう。海岸沿いのツ
ーは落石や海への転落、満潮による通路遮断などに注意が必要である。

（5）森林生態系（針葉樹林，針広混交林，広葉樹林）

北海道は広い範囲を森林に覆われているが、過去の木材の大量切り出しなど
によって二次林化，人工林化したものが多く，手付かずの天然林は意外に少な
い。北海道の大自然にあこがれて道東に来たツアーリストが，ほっそりとした，
樹齢数十年程度の同年齢の，しかも樹種の多様性が少ない森林を見ると，感動
もそれなりのものになってしまうだろう。クマゲラやシマフクロウが営巣する
ような大木・老木があちこちにある，うっそうとした森林こそが本来の北海道
の森林の魅力をかもし出せるだろう。そういう森林は知床や大雪山などいくつ
かの地域に限られてしまっているのが現状である。そこまで行かなくとも，そ
れを彷彿させるような，成熟した二次林をぜひ見たいものである。そういうわ
けで，今回の調査では，厚岸往復の国道や厚岸町内の道路を走る場合も両脇の
樹木の太さや枝の張り具合などをちらちらと見ながら走った。今回，実際に歩
いて森林の中に調査に入ったのは，愛冠岬から北大実験所間，筑紫恋のキャン
プ場からネイパルまでの森林遊歩道，厚岸大橋を渡ってすぐの松葉町からおそ
なえ山までの遊歩道，道道 813 号から見える「町民の森」，別寒辺牛林道，別
寒辺牛第三林道である。

1) おそなえ山：おそなえ山には，いくつかのアイヌ遺跡（チャシ）があり，
歴史探訪ツアーの対象としては適しているが，自然環境をターゲットとするエ
コツアーの対象としては不足が目立った。たとえば，逆さ水松も面白くはある
が，大きく枯損しているし，このような特定の株だけを大切にするのは生態系
の視点から見るとやはずれた印象がある。また，登り口からチャシまでの遊歩
道も中々気持ちのよい森林であるが，いかんせん，距離が短いことと，すぐ下
に市街地が見えて生活の匂いがただよってきてエコツアーとして集中できない。
山頂に展望塔があって，そこからの眺め，特に厚岸湖の眺望はかなりよいので，
厚岸湖の説明などをするのには適しているが，それ以外のエコツアー的な活動

と連続しにくいので商品化はなかなか難しいだろう。

2) アヤメが原の取り付け道路：アヤメが原から道道までのとりけ道路の両脇は良好な針葉樹林となっており、アヤメが原での草原での観察・体験活動と接続して、この樹林に踏み入っての森林体験学習の実施も可能であろう。ただし、後述のネイパル厚岸周辺のように歩道等の整備がなされていないのが難点である。

3) 町民の森：参考までに見に行ったが、これは、伐採によって裸同然の山になったところに、森の復活を願って植林をしているものであり、エコツアーリズムの対象とはなりにくいと感じた。もし組み入れるとしたら、他の、より自然に近い森林の探訪と組み合わせると、この町民の森で植樹体験をすることなどが考えられるかもしれない。

4) 糸魚沢林道：今回の調査で、この林道を通して、国道44号から道道123号のチンベの鼻付近に通りぬけながら、道路の左右の森林を視察しようと入り込んだまではよいが、たまた大きな地震があった後だったため、道路が破損しゲートが施錠されていた。そのため、今回は評価できない。しかし、植生図等で見ると、厚岸湖を取り囲むこの森林は奥深く、野生の魅力たっぷりである。尻羽岬（これは行政上は厚岸町でなく釧路町に属すが）とともに、ワイルドなエコツアーリズムの潜在力を秘めている場所である。

5) 愛冠岬展望台から北大臨海実験所間：愛冠岬展望台から北大臨海実験所間の遊歩道を歩いて下りた。臨海実験所には毎年来ているので、この遊歩道も過去に何度も歩いたが、今回は遠方よりのエコツアーリストを満足させようかという課題を持ちながら歩いた。遊歩道沿いの樹林はまずまずで、特に貧弱ということはないが、感動するほどの巨木、老木、樹種の多様性は見られなかった。遊歩道と平行する沢地に砂防ダム工事がなされているのも自然な印象を低下させていた。また、歩く距離がわずかなので、森林体験をあまり盛り込むことができない。その意味でおそなえ山と同じである。ただし、遊歩道を下るときに木々の間に見える景色は青々とした厚岸湾の景色で、これはなかなか気持ちよい。したがって、この遊歩道をエコツアーに活かすとしたら、愛冠岬からの展望あるいは後述のネイパル周辺の森林体験を楽しんだ後、臨海実験所の水族館あるいは船着場を利用したエコツアーへの移動路として利用することに検討の余地がある。

6) 別寒辺牛林道：今回調査し、過去にも別寒辺牛湿原の昆虫調査の際に何度も入ったが、二次林、人工林ばかりで魅力が低い。海岸の断崖地帯にくらべて、木材の搬出が容易であったためであろう。今のところ、森林体験としてのエコツアーの対象としては考えづらい。ただし、別寒辺牛湿原中部・北部でのエコツアーと連続した森林体験としてメニューの中に組み入れることは考えら

れるだろうが、その場合、湿原体験に対する付録的な位置づけにならざるをえないだろう。

7) 筑紫恋キャンプ場(厚岸町緑のふるさと公園)からネイパル厚岸までの森林遊歩道:ここは遊歩道がよく整備され、のぼり詰めたところには樹木園もあって、樹種の表示板があり、ガイドがいなくても木の名前が覚えられるという利便性もある。この遊歩道沿いの森林は天然林ということで、たしかに樹齢の高い樹木も散見された。ふもとのキャンプ場には一通りのキャンプ設備が整っているのので、エコツアーの基点とするにも適している。同じことが、上り詰めたネイパル側にもいえ、駐車場やネイパル厚岸という青少年の宿泊・体験活動施設、サッカー場、ゲートボール場、フィールドアスレチック、展望塔、木工体験小屋などが並んでいる。また、上述の愛冠岬展望台とも近い。

沢地の上部に桂の巨木のあるところが2箇所以上あり、うち1箇所には「仲良し桂」と看板が出ている。これを含め、大き目の木があり、下草が自然な感じのところもあり、森林内の自然観察が可能。とりわけ、遊歩道が整備され、よく管理されているのがよい。町内の他の場所でこれだけの遊歩道を整備するコストを上回るベネフィット(より自然度が高い)の得られるところはないのではないか。なお、この一帯は、トドマツ林だけでなく、広葉樹林にも下草が笹の部分が多く、ややつや消しであるが、笹でないところも十分ある。

樹木園はよく整備されているが、規模が小さく、北海道産でない樹種、庭木のように剪定してある樹木もあってエコツアーにはややそぐわない印象である。しかし、道内外の樹種を名札を見ながら比較できるのはよい。また、鹿よけネットがあるので、下草が自然な感じのところがある。これを手入れしないで自然な下草にしてほしいところである。

ネイパルや樹木園のある台地上からキャンプ場へ降りる4号遊歩道は一部急な階段(しかも少し傾いているところがある)があるが、つづらおりのゆったりとした下りで幅広い。谷の上部には広葉樹の自然な感じのところがある。キャンプ場に降りる直前の坂道の草原は帰化植物が優占しているので、解説ではこのことに注意したい。

以上のように、筑紫恋・ネイパル地区の森林はインフラ・ストラクチャーが整備されているし、天然林としての質も悪くなく、スケールもそれほど小さくはないので、ガイドの解説内容や自然体験プログラムを構築すれば、物理的には即座に実行可能な場所である。ただし、スケールが北海道の森林としては小さいことと、あまりにも整備されすぎていて、ツーリストが自然の中にどっぷりつかるといったイメージからややかけ離れるというのがやや難点であろうか。これは見方を替えれば贅沢な悩みかもしれない。市街地からそう遠くないところで、安全に森林体験・森林学習を組み入れたエコツアーが実施可能であり、

海洋エコツアー，湖沼・干潟エコツアー，湿原河川エコツアーとセットで考えるならば厚岸のエコツアーのメニューの一員として十分価値を持つであろう。

8) 森林体験エコツアーの内容：エコツアーリストとして費用を払い，道東で森林体験ツアーに参加する者からすれば，次のようなことをガイドに求めたいところであろう。その森林は森林生態学上，どのような区分に属するか(例：トドマツ林，エゾイタヤ・シナノキ林)，その区分は分布上どのような特性を持つか(例：例温帯の湿った，やや酸性土壌の場所に成立する)，今いる森林の主要樹種は何か(10種程度)，いくつかの樹木に具体的に触れながら，木の種類，およその樹齢，特徴，分布，人間の利用など，低木やツル植物，林床植物の名前と特徴，草や木の葉，実を使った体験活動，今いる森林に生息する主な鳥獣類とその特徴，鳥の姿，鳴き声で種を区別し，説明を加える，特徴的な昆虫や小動物，コケ，土壌，地下水，今いる森の人間生活(アイヌ，開拓後の和人)とのかかわり，森林の地球環境における位置づけと価値。

4. 人間生活との自然とのかかわり

アイヌの生活は自然と一体化したものであり、自然を対象としたエコツアーの中で十分言及可能であるが、漁業基地としての「厚岸場所」成立後、そして明治に入ってから屯田兵入植移住の開拓の歴史は自然改変の歴史でもあった。農業が始まって以来の人類の歴史は自然生態系を農業生態系、更には都市生態系へと置き換えてきた歴史であり、それが人類の営みの本質でもあろう。したがって、これまでの北海道の開拓の歴史を否定的に見る必要はないであろう。しかし、その中で自然を元通りにできないように破壊することも少なからず含まれていた(例：エゾオオカミの絶滅)ことを反省し、取り戻せる自然は取り戻し、これからの開発は自然を持続可能な範囲で利用するものへと変えていかなければならないことは多くの国民の思うところであろう。

厚岸における人間と自然の闘いの歴史は、太田屯田開拓記念館、厚岸町海事記念館の展示物や、厚岸町史の記述に見ることができる。筆者も今回両館と屯田兵屋を実際に見学することで、多くの知識を得ることができた。エコツーリズムの対象には、人間と自然のかかわりも含まれる。開拓と自然のかかわりなどもツアーのプログラムに組み込むことが可能であろう。このあたりになると、筆者のような自然系を研究・教育の対象としている者の手に余り、歴史や人文地理、社会経済系の研究との連携が必要となる。より現代に近づいたところでは海事記念館の漁業や林業の展示物、尾幌地区にある尾幌酪農ふれあい館などの体験施設がツアーで活用できるだろう。

なお、インターネット検索によると、厚岸ホースクラブでは乗馬体験だけでなく自然の中でのトレッキングも実施しているようであり、厚岸町の各種エコツアーのメニューの一つとして活用できるだろう。その場合、単に馬に乗って歩きおいしい空気を吸うということだけではなく、乗馬の前後に、トレッキングを行なう地域の自然環境の特徴、馬と厚岸とのかかわりなどについて解説を行なうことで、よりエコツアーらしいものになるだろう。

5. エコツーリズムと地域経済

最後に、エコツーリズムが地元経済に与える影響について、若干考察しておきたい。小寺氏提供の資料によれば、現に行なわれている、カヌーツーリング、アザラシウォッチング、アサリ堀り体験ツアーがそれぞれ、1年間の売り上げが200万円前後、100万円前後、60万円前後となっていて、副業としては成立しても、エコツアーだけで生計を立てられるレベルに達していないことがわかる。更に、カヌーもアザラシ観察船も設備投資額がかなりのものになる。アザラシツアーについては、予約客があっても悪天候のために船が出せず、キ

キャンセルになることが多いとのことである。このことを考えると、森林、草原、湿原、湖上、砂浜、漁業、酪農など、天気や季節に左右されない多様なメニューを厚岸エコツーリズムの中に盛り込み、トータルでのツーリズム収益を上げることが現実的かもしれない。また、エコツアーの解説や自然体験の内容が良質になればなるほど、リピーターも増え、口コミやインターネットでの情報交換を通してツーリストが増加するであろう。まずは、今回提案したものをたたき台に、数多くのエコツアーコースを設定し、解説や自然体験プログラムを開発し、それを実践にかけることで改善していくより他に近道はないのではないか。そのために、今回の報告が少しでも参考になれば幸いである。

IV. まとめ

厚岸町は、大規模な湿原、汽水湖、切り立った海岸、森林、海鳥やアザラシが繁殖する大黒島など、極めて多様で豊かな自然をかかえており、エコツーリズムの一大中心地となれる潜在性を秘めている。

エコツーリズムとは、スー・ビートンによれば、教育的・解説的な要素を含み、持続可能な方法で管理・運営される、地域社会に経済効果をもたらす、自然に基づいた（自然のもとで行なわれる）活動である。

本研究は、厚岸町の潜在資源を浮き彫りにし、それらの場所を利用したエコツアーの内容について提案を行なうとともに、エコツアーが自然環境と地域経済影響を定性的に予測することを目的として、2003年5月から11月まで延べ10日間にわたって調査を実施した。

主な調査場所は、大黒島、小島、厚岸湖、愛冠岬、チンベの鼻、筑紫恋、別寒辺牛湿原、別寒辺牛川である。また、上記の現地踏査（現行の体験ツアーの体験取材を含む）のほか、地元関係者とのインタビュー、パンフレット、調査報告書などの資料収集、野外活動施設の視察も行なった。

調査結果に基づき、厚岸の自然環境のエコツアー適性を、以下の評価項目に照らしながら検討した。

自然環境の保全、あるいは持続可能なものであるか。（持続可能性）

単なるレジャー・アウトドアーではなく、自然についての知識・理解・感興の得られるものであるか。（啓発性）

遠方から旅費をかけてまで参加したくなるだけの商品価値があるか。いいかえれば、厚岸ならではの自然・自然産業が生かされているか。（商品価値）

地域の生活文化に悪影響をもたらさないか。（生活文化防衛）

地域の経済活性化につながるか（地域貢献）

(2) 海洋・岩礁・砂浜生態系

海中生物観察ツアー（新提案）：グラスボート，小規模の網や釣り道具を使った動物採取を行い，寒流帯特有の生物の観察ツアー．水族館施設を拡充しての連携．栽培漁業センターとの連携．

大黒島アザラシウォッチング（既存）：船の乗り心地，スピード，解説内容，アザラシとの距離に検討の余地がある．

海上バードウォッチング（既存）：アザラシ・ウォッチングの付録として行なわれているが，解説内容をもっと充実できると思われる．

大黒島本体のエコツアー上陸しての植物，歴史遺産のウォッチングツアーである．解説内容の質が求められる．生態系（特にコシジロウミツバメ営巣地）維持，施設整備が課題．

漁村探訪（新提案）：昆布干し体験，廃校を僻地教育ミニ博物館化，地引網体験，生態系と持続可能な漁業についての解説が必要．

（２）厚岸湖

干潟エコツアー（改善）：現行の潮干狩りだけではエコツアーにならない．干潟の生態系についての学習や，アサリ栽培漁業についての解説を組み入れる．

アッケシソウ生息地見学（新提案）：単にアッケシソウを鑑賞に行くのではなく，アッケシソウの生態，塩湿地生態系についての説明が必要．

水鳥ウォッチング（新提案）：この地域の鳥の生態についての解説，世界における位置づけなどの解説が必要．ツアーが鳥の営巣におよぼす影響の把握が必要．

氷上ツアー（新提案）：結氷についての物理学的，自然地理学的説明，人々による氷の利用の説明，氷の下の冬の魚介類の生態，穴を開けての小魚釣り，氷下アサリ採り（いずれも漁業権者の承諾が必要）など．安全性の確保．古番屋ツアーのノウハウ活用．

（ア）河川・湿原生態系

別寒辺牛川・カヌー下り（改善）：河畔林や生息している鳥獣類，魚類について，ならびに人々がこの川のかかわりについての解説の充実．カモ類への影響把握．

湿原ツアー（新提案）：木道設置の是非についての検討．解説・活動プログラムの開発．

川釣り：釣るだけではエコツアーにならないが，釣った魚について解説をし，リリースすることによって，エコロジカルなものになる．

（イ）岸断崖生態系（草原，風衝林）

愛冠岬：検討したが，断崖上の自然観察は危険で勧められない．展望地として優れているのでエコツアーの出発点またはゴールとして適する．

チンベの鼻（アヤマが原）（新提案）：展望景観を楽しんだ後の，草花ウォ

ッチングは十分エコツーリズムの対象となる。ヒオウギアヤメに偏重した植生管理はこれと矛盾する。

断崖の下部の地学・生物観察（新提案）：化石，スランプ構造（層間褶曲）。危険防止に注意が必要。

（５）森林生態系

糸魚沢林道・尻羽岬（未調査）：ワイルドなエコツーリズムの潜在力を秘めている。

愛冠岬展望台から北大臨海実験所間：臨海実験所の水族館あるいは船着場を利用したエコツアーへの移動路として利用可能。

別寒辺牛林道：湿原体験に対する付加的な森林体験に利用可能。

筑紫恋～ネイパル厚岸の森林体験（新提案）：非常に設備が整っている。それがプラスでもありマイナスでもあるが。森林も意外と自然度が高い。解説内容を提案した。自然体験プログラムの開発も望まれる。

最後に、厚岸の自然と人間生活のかかわりおよび、エコツーリズムが地元経済に与える影響について、若干の考察を行なった。

謝 辞

インタビューに応じていただいたほか、種々便宜を図っていただいた、厚岸水鳥観察館の永田正行氏と澁谷辰生氏、インタビューに応じて頂いた厚岸町役場の高田紀和氏、味覚ターミナル・コンキリエの小寺 勉氏、厚岸町観光協会の宮川佳治氏、臨海実習で御世話になった北大臨海実験所のスタッフの皆さん、海産無脊椎動物について教示いただいた北海道教育大学釧路校の蛭田眞一氏に、心より感謝する。

引用文献

Beaton, Sue (小林英俊訳) 2002. エコツーリズム教本. 平凡社.

小林寛子 2002. エコツーリズムってなに? 河出書房新社.

橋本正雄 1986. 鳥類. 道立自然公園調査(厚岸道立自然公園)報告書. 北海道自然保護協会.

釧路国際ウエットランドセンター技術委員会 1996. Wetlands Ecotourism in Eastern Hokkaido, Japan.

<http://www.kiwc.net/newsletter/kiwc3/-1-/EC-1.html>.

中谷正彦 2001 .別寒辺牛湿原の高層湿原域における高山蛾及び昆虫相の解明 .
平成 1 2 年度厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助研究報告書 .

岡崎由夫 1986 .地形・地質 .道立自然公園調査 (厚岸道立自然公園) 報告書 .
北海道自然保護協会 .

The International Ecotourism Society 2004 . What is ecotourism?
<http://www.ecotourism.org/index2.php?what-is-ecotourism>. On 21 Feb. 2004
accessed.

辻井達一・長谷川栄・新庄久志 1986 .植物 .道立自然公園調査 (厚岸道立自
然公園) 報告書 .北海道自然保護協会 .

内山博之 2001 .厚岸湖畔におけるアッケシソウの植生分布及び植生環境に関
する研究(II) .平成 1 2 年度厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助研究報告書 .

以上 .